

風"s・風のたよりオンライン版

2003/6/1 No.95

風のたより95号

アジア女性資料センター沖縄スタディツアー報告書
女たちのメディアジャック(うないフェスティバルについて)

源啓美さん(記録：土井ゆきこ)

2003年3月28日 スペース結にて

ナイロビから沖縄へ、沖縄から北京へ、流れをつくった「うないフェスティバル」

■ 『うないフェスティバル』 生みの親、源さんは語る

「彼女はラジオ局のディレクターで、あらゆるジャンルの女性たちと出会っていたことがもとで、『うないフェスティバル』の生みの親となった」との紹介で現れた源さんはアップのヘヤースタイルのちょっと小柄な人。早い口調なのでメモが追いつかない。

■ 私の原点は島にある

今日3月28日は、大切な日なのでここにはいけなかった。その大事な日を忘れ約束してしまい、今ここにいるのですが、58年前の今日、慶良間(けらま)諸島で集団自決があった日です。慶良間諸島は世界でも有数な透明度のある海の美しい島です。私の島では半分の人が死にました。その慰霊祭がある日で取材しなければならなかったのです。去年は「57年目の証言」として取材をしました。自分の生まれた島なのですが、身内だからこそ話してもらえなかった。なぜお互いに殺しあうことができたのか？わからなかったのです。当時16～17歳の生き残った人の証言は(彼は母と妹を殺しています)「愛する者ほど確実に殺した。なぜなら米軍の捕虜になると女性は強姦され男は耳をそがれ、目をつかれて殺されるということ本当に信じていたから。」と語った。

■ 「しまった! 一人だけ生き残ってしまった」と思った母

私の母は南部で手りゅう弾を手に集団自決をした。目が覚めたとき彼女は「しまっ

た！」と思った。「一人だけ生き残ってしまった」と・・・生きる方が困ったわけです。波の音を頼りに暗やみの中、海に飛び込みましたが引き潮で死にきれなかった。全身傷だらけで気がついたときは、野戦病棟にいた。今私がここにこうしているのは、そんなわけです。

■ ラジオ沖縄25周年開局記念

社長以下は正規の社員30名という小さなラジオ沖縄で30数年前報道部に配属され、4月の女性週間の取材を通して性差別があることを、虐げられた歴史があることを初めて知った。先駆的に女性問題をやっている人に電話でインタビューをした。そのことが女性問題・平和問題・環境問題につながった。

ラジオ沖縄がちょうど25周年開局記念ということで、女性のための講演会を企画していて、100万円の取材費が出て、「ナイロビの国際会議に行ってもいい」ということだったのですが、言葉の問題で取材ができないので、ナイロビから帰ってきた人を取材して沖縄の女性たちに伝える企画をやりたいという提案をしました。

■ ワークショップ形式の手作りお祭りを・・・

1985年ナイロビから沖縄へ「女から女たちへ」の報告会を聞いて、女性たちがイキキして発表をしていたのを見て「これだ！」と思いました。女性たちの集いするならこのワークショップ形式だと思った。

講演会は話を聞いたときはわかったような気がするけれどそれで終わる。自分たち自身が何かを主体的に、頭を使って、行動することがいいと思った。

それから高里鈴代さんに声をかけ、憲法をやっている琉球大の講師の人にも声かけ動いているとき、那覇市の女性行政の人から(ラジオ沖縄のモニターの一人でもあった)行政の予算70万円を提供する話が入ってきた。この当時、行政と女性問題がくっつくことは良しとしなかったのが悩んだけれど、行政が変わらなければ変わらないのではないかとということで受けることにしました。

■ 6人の事務局でスタート！

6人のうちナイロビに行っているのは3人だけ。ワークショップをどうやったらわかってもらえるか至難の業でした。「大学、文化祭をイメージして下さい。日頃やっていることをアピールして下さい。この指止まれ！ やりたい人がやろうよ」と声かけました。

女性団体に案内を出しましたが、それはトップではなく組織の中で実働している人に行く一本釣りのような形で、「実行委員会に参加してください」と呼びかけまし

た。

弁護士やマスコミや税理士やそれぞれの組織の中で頑張っている人も表に出るのはいつも男性なので、その組織で頑張っている人に呼びかけました。

基本は、女性たちがそれぞれ持っている力を寄せ集めること。歌もテーマもオープニングメッセージもみんな女性の手で行いました。「うない」とは女性のことですが、単に女性単独で意味するのではなく男兄弟にとっての女兄弟のことです。

■ 女たちのメディアジャック

レギュラーを外し、朝9時～夜9時まで12時間、女性問題だけを行いました。当日の会場での講演展開やコンサートワークショップを中継しました。また女から女たちへの100人のメッセージも伝えました。県外の反響が大きかった。そのメッセージに2年目からは男性の参加も許されましたが、その選定はどんな人も有名な人でも良い仕事をしていても妻に対してどうなのか、ということではずされることもありました。

■ すべて女性たちの手で

コンサートも古典音楽・ロック・オペラすべて女性たちのミュージシャンだけで行いました。その舞台のマイクから流れる話は、赤ちゃんが生まれたばかりであふれる乳をガーゼでおさえているとか、ジャズの人にはリユーマチではあるが歌があるから好きなことができるからこうしていられるというメッセージ。またロックのプロデューサーは子供にお弁当持っていくことを気になるとかそんな話がマイクから流れるコンサートでした。

沖縄には古典音楽がありますが男文化の産物で男の教養でした（女の気持ちをうたっているのに）。最近も女性も参加するようにはなりましたが、正式な舞台になるといっさい出てこない状態でした。人間国宝の人に女性たちだけで古典音楽をしたいと言ったときにはここは遊郭じゃないと言われた。

■ 非常識な積み重ねをしてきました(当時としては)

毎年心がけてきたことは、今年は何を新しいことをしようかということ、10年間続けてきました。10年経ったら常識にかわってきた。70万円を行政が出資し、200～300万円は広告を取る形で継続。

ナイロビの風を受けスタートしましたが、1994年北京国際会議にみんなで参加できました。一つのつながりを作ってきたことは、それなりの評価があると思う。

■ 「うないフェスティバル」がみんなの拠点

女性たちのネットワークができた。「うないフェスティバル」10年間で自分がかかわってきたことを振り返ってみるといろいろありますが、その中でちょうど土井委員長が出てきたころ、女性たちの政治参加をと...「うないサミット」を2年続けました。

そこで「人に出ると言うのならば、貴女も出ては？」と言われ、高里鈴代さんが議員になった。いろんなグループがあったが「うないフェスティバル」を軸に一同に介してみんながつながり、分かり合うようになり、北京へとつながっていった。ナイロビで受けた風は「うないフェスティバル」で育ち、1994年北京国際会議へ流れて行った。

電子メール：huzu@huzu.jp

ウェブページ：<http://www.huzu.jp/>

風の交差点 風"s